

2025年度大学院博士前期課程一般入学試験（第Ⅲ期）問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻 哲学歴史学専修	選択問題

以下から 1 問を選んで論述しなさい。なお、選んだ問題の記号を最初に記すこと。

- A. 18世紀後半における清朝の新疆統治体制がどのようなものであったのかを論じなさい。
- B. 1860～1880年代における清朝の新疆統治体制の変化について論じなさい。

解答または解答例：

Sample Answer(s) or Outline：

【解答例】

A. 1755年のジュンガル征服以降、清朝は天山北路（新疆北部）を支配下に組み込み、強い軍事的性格を帯びた統治体制を構築した。すなわち、満洲・オーロト・チャハル・シベ・ソロンなどから成る駐防八旗体制と、モンゴル諸部の首長を旗長（ジャサク）に任命して属民を統率させるジャサク制とを併存させたのである。駐防八旗は国境地域の防衛を担っただけでなく、屯田経営や開墾、遊牧にも従事し、軍糧の自給と地域経営も担った。新疆北部の中心地イリにはイリ将軍が置かれ、駐防八旗を統率するとともに、天山南北を含む新疆全体の軍政を総轄した。

これに対し、新疆南部（回部、タリム盆地）では、在地の有カムスリム層をベグ（伯克）として官人化するベグ官人制が採用された。ベグとはオアシス都市社会における在地有力者であり、清朝は彼らに爵位や官職を授けて清朝官僚体系に組み込み、徴税・裁判・行政など日常統治を担わせた。

このように清朝は、新疆北部では駐防八旗制とジャサク制を併用し、南部ではベグ官人制を用いるという多元的統治を展開した。それは軍事的直轄支配を基軸としつつ、在地勢力を制度的に包摂することで広域支配を安定化させようとしたものであり、18世紀後半における清朝帝国統治の典型的形態であった。

【解答例】

B. 1860年代、新疆では清朝の支配体制が大きく動揺した。1864年の西北ムスリム反乱を契機として天山南北においても反乱が広がり、従来のイリ将軍を頂点とする軍政体制とベグ官人制は崩壊した。とくにタリム盆地では、コーカンドからヤークーブ・ベグが侵入し、カシュガルを拠点に事実上の独立政権を樹立した。またイリは1871年にロシアに占領され、清朝は新疆の実効支配をほぼ喪失した

これに対し、清朝は漢人官僚の左宗棠を派遣して新疆の回復を目指した。左宗棠軍は1876年から段階的に天山北路・南路を回復し、1877年にヤークーブ・ベグ政権を崩壊させ、新疆を回復した。その後、清朝は従来の軍政中心の間接統治を見直し、中国内地に倣って省制を導入した。これが1884年の新疆省設置である。これにより、新疆は甘粛から分離し、新疆巡撫が置かれるようになった。また従来のイリ将軍の権限は大幅に削られ、その権限は駐防八旗の統轄やイリ・タルガバタイ地域の防衛等に限定された。

このように1860～1880年代の新疆では、内乱や外圧により旧来のイリ将軍を頂点とする多元的な軍政体制とその下における間接的統治体制が崩壊し、中国内地と同様、中央集権的な省制への移行が進んだのであった。

出題意図：

Purpose of Question：

本問題は、清朝の新疆統治に関して、時期ごとの統治構造の特徴とその変化を構造的に理解しているかを問うものである。Aは18世紀後半の軍政的・多元的支配体制の仕組みと地域差を整理する力を、Bは1860年代以降の内乱・外圧を契機とする体制転換、とくに省制導入への歴史的意義を論理的に説明する力を測ることを意図している。